

鯨の墓

浅海井浦広浦シロガタオの国道二一七号から山道を15m程はいりこんだところに鯨の墓が2基ある。1基には明治二十一年子旧正月十六日南無阿弥陀仏鯨魚塔曾根角蔵網組と記されている。曾根角蔵さんは当時浅海井部落長であった。網組というのは複数の網元で組織されていたということである。一基には明治四十年十二月六日南無阿弥陀仏鯨魚墓と記されている。古老の話すところによると、もと広浦越しの道添い(管医院の裏手)にあったのを浅海井部落の手によって現在のところに移転されたものである。

なぜ上浦に鯨の墓があるのかということだが、日本周辺には昔から鯨が住んでいたらしく、豊後水道のあちこちに鯨の姿を見ることがあり、時にはこれを捕獲して大きな栄養源としてたり不漁の年など住民は飢餓から救われることもあったといわれている。また鯨は母性愛の強い動物であるなどから明治年間広浦で捕獲した機会にその霊を慰めるために墓をたてたものであろう。

明治21年に捕獲された鯨については、今の磯崎の海岸

の岩場のなかにはいりこんだところを捕えたということは語り伝えられているが、その時の状況については話が残っていない。明治40年に捕獲された鯨については、いろいろにいい伝えられているが古老の話を総合すると大たい次のようなことである。

鯨の発見者はリエさんか？

最初に鯨を見つけたのは浪太の児玉リエさんと浅海井の木村良吉さん(文久2年11月23日生れ当時46才)の二人で、どちらが先であったかということで当時役場と部落と当事者とでかなりの論争があったもようであるが種々のいい伝えから推測するに最初の発見者は児玉リエさんで、リエさんは鯨を見つけるとそのまま浪太に知らせに帰りその間に木村良吉さんが通りかかって見つけたというのではないかと考えられる。

東の空が白みかける頃、リエさんは紺屋(浅海井にあった)に仕事にいく途中、広浦の砂浜で異様な音を聞いた。近づいて見ると大鯨がからだ半分砂浜に乗り上げてブーブーと呼吸しながら砂を吹きあげていたので、そのまま引返して浪太郎部に知らせた。

浅海井の良吉さんは広浦のノジカ谷に畑仕事に行く途中鯨を見つけ、腰にはさんでいたタオルをエラの中にお

しこんで目じるしとし血相を変えて家に帰って知らせた。

かくて両部落に鯨の話が広がると、村人たちは山を越え子を背負ったりして広浦の浜に集ってきたので、大きな山ができたという話も残っている。鯨の大きさは7尋あったとも11間あったともいわれている。からだ半分は海中にあり尾ビレを大きく動かすと広浦の海面に大きな波が起ったといわれていることから考えてもかなり大きなものであったことが推測される。木村良吉さんは海にスム（もぐる）のが上手な人で、自分の腹に綱を巻きつけて鯨の腹の下をスンで鯨に綱をかけ、二重にしばって海辺の人たちに引きあげさせた。鯨の背に乗った時は「軍艦のようだった」と言ったということである。

捕獲された鯨は拾得物ということで入札したそうであるが、浪太郎の管倉蔵さんが30円？（昭和50年の価格換算約9万円）で買いとり、生肉や塩づけにして地域の人は勿論のこと小野市木浦方面にもカゴでかついで幾日も売りに行ったということである。鯨の舌の部分を食べた人の話によると、硬くてなかなかかみ切ることができなかつたという。また船持ちの人は海から鯨肉をとった

そうだが、その辺の海は鯨の血で赤く染ったという話も残っている。

昔は豊後水道によく鯨が姿を見せ、当地沖合の大島近海にも潮を吹きあげながら遊泳する鯨をたびたび見ることができたという。捕獲された鯨についてはイワシの大量を追ってきたものだろうともいわれ、又ジャチに追われて砂浜に乗り上げたものだろうともいわれているが、いずれにせよ二頭の鯨の墓が建てられているということは近郷海岸部にも他に見ることのできないめずらしいことである。

その後も何度か浅海井の沖合に鯨を見かけたという。村人たちはそれを見て「鯨が墓参りに来た」といって感心したということである。また死んだ鯨は夫婦であったという者もいるし、墓参りに来たのは子鯨であろうという話も残っている。

『上浦にのこる伝説』より

上浦町教育委員会編

注 鯨の供養塔は全国に三十数基あるという。